
無敵スライム

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵スライム

【Nコード】

N2004X

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

最弱のモンスターはなんだろう？ その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってこう、“スライム”だ。

だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。

「無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！」

第一ゲル 無敵S VS パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがった、ツマミついでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなど等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱つつたらポーツつつ立つてるだけのナマケモンキーだろ”と言う。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウイプスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言っただよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろうが！ 急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れていようものなら中級者と言えどてこずる恐れがあります。その点、初歩的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウイプスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！ デッドリーフなら、枯れてる

しちよつとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まあまあ待て待て、と皆を諫めつつ言う。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よおく考えてみるや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねえか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？ どんな初心者でもそいつは倒せらあ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうね。因みに今年で六つですが」

「えつ、えつ、何？ そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそつと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいつせーの、せでモンスター名を叫んだ。

「……スライム！」

と。スライムとは、最早冒険者らにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概は大きさにして二十から三十カラム前後（約二十から三十七

ンチ)、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから二回り位大きい程。

地方によって違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言われるが実際には水分を内包している表皮を破つてしまえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴っていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランキングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう気の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかった……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かっている頃だった。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行つて来る。”と言い、

あるうことか町外れの草むらへと走って行ってしまったのだ。

これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そうかと思つたその時であつた。

ガサツ、と草むらが揺れ動く。

「!？」

が、彼は腐つてもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとつた。流れる様な一挙一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元がない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしる素手でやり合えるか？ 酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじいつ、と凝視した。

それは思つたよりも小さくて……。

「えつ……？」

子供の遊具を二回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじゃねえか！」

大方道に迷ったのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かったところで、一瞬でも自分を恐怖させたちっぽけなそれを、リーダーは許す事が出来なかった。

。。。そうだ蹴りでもくれてやろう、そう思い再び雑魚を視界に収め……。

(あん？ どこ行った……?)

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリーダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

ベチャアアアア！

「ぐうあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

パーティー昇龍のリーダー、ブレットに勝利した。

……翌日、ブレットは瀕死の状態で見られ、教会の世話になっ
たという。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

第五ゲル 無敵S VS なりたて拳士ダベッカ (拳士Lv・4)

「よしっ あといつたいだ あといつたいたおせば ゴールドが
たりて あたらしいグローブ かえる！」

ガサツ……

「きたああああ かねをだせええええ！」

モンスター スライムがあらわれた

「ウソだろっ！？ いつせんにも ならない……」

グバツ！

「う、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

けんしダベッカに しょうりした

第七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン (勇者Lv.???)

「うーん あくましてんのうを けちらしたはいいんだけど
…ここどこだ？」

ガサツ…

「!?!? そこだ!」

セインは ドラゴンスライサーを はなつた

ズバツ!

モンスター スライムは まつぶたつになつた

「っと スライムだったのか ごめんな ものすごい さっきを
かんじたから …… って、スライム!? まさか ボクのごきょう
ちかくまで もどつてしまったのか!？」

セインは あわて はしりさつた

ズル…ズル…

ピチュツ…

スライムは くつついて さいせいした

スライムがあらわれた

「どりゃあ！」

バシヤ……

スライムがあらわれた

「ぬオオオ！」

ベジヤ……

「おい ……リーダーさ なんでスライムばっか かってんの？」

「このあいだの いっけんいらいですね」

「あんがいおっちゃん スライムに やられたんだったりしてー」

ガサツ……

スライムが あらわれた

「きさままで　　ううたいめだ　かく」オオー！

バシィッ！

「ぎゃあああああああああああー！？」

ブレッドに　しょうりした

「「「リーダーー！？」」」

「なんだコイツ リーダーを いちげきで！」

「ただの スライムでは ありません ステータスじょうぼうが
いっちしない」

「おっちゃんを よくも！」

「くらええええ！」

じゅうけんしは マグナスラッシュを はなつた

「しかたありませんね！」

けんじやは スターライトを しようした

「わがほのおよ てきをやきつくせ！」

ほのおのまほうつかいは プロミネンスを しようした

ビシッ ドカッ ベチャ

「ぐあ ああ………」

「ばかな………」

「こんなことって……」

パーティー昇龍に しょうりした

第十二ゲル 無敵S VS パーティアサシニアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晩餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやってくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシニアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……うまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであったり、深い帽子着用であったり……目と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人数百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言った。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく呟く。

「だがしかあし！ ……ゴホン ……ゴメン、興奮し過ぎた ……
我々以上に ……襲撃を成功させているパーティーは ……まだまだ居
るだろう ……そこで ……明日から ……クイクス大陸に ……向かう ……
…」

「クイクスに！？ ……ごめん ……キャラ作り、キャラ作り
…」

「我らは ……次のランクに ……進むべき。それに ……ここでは ……
名を知られ過ぎたし ……潮時だと思う ……」

「確かに ……そうだ ……」

「俺は ……子供に石を ……投げられた ……」

「まだいい ……ワタシは問答無用で ……切り掛かれた ……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”の悪名は、
あまりに知られ過ぎてしまった。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼったくり商人などを
ターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行うという
内容だ。

だが、それはれっきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そ
んな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遥かに多いの
である。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人ら以外は誰も知り得ない事だろう。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であった為に、名は派手に売れてしまい挙げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であったが口には出さなかった。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならない！ いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がらん事を夢に見ながら！」

「「リーダー！ キャラ、キャラ！」」

「あ……うん、ごめん……とにかく……打ち上げはここまで……明日の、準備しよ……」

「あの……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

・

「皆……お腹いっぱいになっただ？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……こっそり、帰ろう……さらば……」

「「「さらば」「」」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保っているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

（何か……居る？）

自分の後ろを影のようにへばりつき追って来る何かがある。確かに居る。

(なら……)

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投てきした。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ二発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なっ……か、変わり身だと!？」

ガサッ……

「しまっ……!？」

モンスター　スライムがあらわれた

「えっ……?」

ばしいいっ!

「きゃあああああああああああああああああああー!」
「?」

アサシンアサルト リーダー クリスにしようりした

第十四ゲル 無敵S VS 速射ちガット (銃士LV・11)

「ふん どんなモンスターも おれの はやうちには かなわな
いぜ」

ガサツ……

「ん、そこだあぁ！」

ガットは はやうちを しょうし……

ベチヤア！

「な、おれよりはやいだとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

モンスター スライムがあらわれた

ガットに しょうりした

「ちょ、ちよつとまって おいてかないでよ!」

「うるさいな なら そのにもつを へらせよ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「このにもつは わたしのせんりひんなの ひとつたりとも
ばなせるわけないでしょ!」

「ならあしをひっぱるな はやくあるけ ペースをみだすな」

「なによー!」

「なんだよ!」

バチイッ ベジヤッ

「「ギゃあああああああああああああああああああああ
ー!?!」」

パーティー 美女とケダモノ にしよつりした

「ようしよし レベルもあがったし これでおまえも りっぱな
ビーストテイマーだ」

「ありがとうございます これでボクも……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「むっ ちょうどいい あのスライムを なかまにしてみる」

「はい！ えつとまずは エサをなげて……」

バチイン！

「うわあああああああああ！？」

「なんだと！？」

ビチャアツ！

「ぐあああああああああああああ！？」

ビーストテイマー師匠と弟子に しょうりした

第十七ゲル 無敵S VS 買い物帰りの少年 (一般人)

「はあ はあ はやくかえらないと くらくなっちゃう」

ガサツ……

「うっ……モ、モンスター!?!」

モンスター スライムがあらわれた

(モンスターにであつたら しずかに しずかに……)

バサツ!

モンスター ウルフがはいごからきしゅうを しかけてきた

「!?!」

ドスツ!

「きゃいいいいいいいいいん!?!」

モンスター ウルフにしょうりした

ガサツ……

スライムは さつていった

「いったい なにがおきたの……？」

しょうねんは ぼつぜんと たちつくした

ドカツ

「グオオオオオオ！」

モンスター ギガベアーにしょうりした

「よし いらいたっせいだ さっさとかえって ほっしゅつにあ
りつくか」

ガサツ……

「ん なんだ？」

モンスター スライムが あらわれた

「スライム……？ よし ついでだし たおしてやる……」

バシィ！

「ぐう あああ！？」

クリフに しょうりした

「う、そだ……おまえは いったい……」

バシィィィィッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああー!?!」

クリフに しょうりした

あああああああー!?!「「「

パーティー デュアルにしようとした

第二十一ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍リーダー ブレッド

「ふう きょうはここで のじゅくだな」

「そうですね テントは わたしが はりましょう」

「ごはんは わたしつくる！ ……ところで リーダーは？」

「あっちで すぶりしてるよ ……よほど くやしかったみたい
だな」

「ふんっ」

ブン

「ふんっ！」

ブン

「はああっ！」

ビュン

「うおおおおお！」

ガサツ……

「でたな　そこかあああああ！」

ドスツ！

「ぎゃあああああああああああああああー!?!」

パーティー昇龍リーダー　ブレットに　しょつりした

第二十三ゲル 無敵S VS 分かれ道の案内人 (Lv・6)

「さあ あなたは みぎとひだり どちらのみに いきますか
」？」

「うーん ……みぎだ！ みぎにいく」

「みぎですね では おきをつけて……」

おとこは みぎのみちへと すすんだ

(どちらにすすもつが あのよいき ですがね)

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライムですか あなたは どちらのみちへ？」

ベチャアツ！

「ぐうあああああああああああああああああああああああ
あ！？」

あんないにんに しょうりした

スライムは ちよくしんした

第二十六ゲル 無敵S VS 瀕死パーティー サファイア (戦士 治療師)

「もうおわりか？ チームサファイア」

「ぐ おのれ こんなところで ぜんめつしてしまうのか」

「そうだ せめてやすらかに ……きえてしまえ！」

モンスター レッサーデモンは デスフレイムをしようした

ガサツ……

スライムがあらわ……

ドンツ！

「なっ ス、スライムだと!? じゃまをするな」

「!?!? すきありいい!」

ズバツ！

「ばかな そんなことがあぁ!?」

レッサーデモンに しょうりした

「かった……のか？」

ズドッ！

「ぎゃあああああああ！？」

瀕死パーティーー サファイアは 全滅した

第二十七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン2 (勇者Lv:???)

「いくらあるいても でくちがない ……さては てきのようじ
ゆつか!?!」

ガサツ……

「!?!? あまい そこだ!」

セインは ソニックカッターツヴァイを しようした

ズバアッ!!

モンスター スライムは バラバラになった

「あつ またスライムだったのか ……ものすごい さっきをか
んじたと おもったのに ホントにごめんな」

セインは さきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは くつつきさいせいした

「……………」

スライムは セインのすがたを きおくした

第二十八ゲル 無敵S VS 呪咀吐きアン (呪術師Lv・41)

「ああ …… にくい にくたらしい」

ガサツ……

モンスター スライムが あらわれた

「ああ にくい くるおいしいほどにくい！ いのちとひきかえに
しても おしくないほどにくい！ にくいにくいにくいにくいにくいにくい
にくい！」

ベシッ！

「おおのれええええええええええ おまえもにくいイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

呪咀吐きアンに しょうりした

第二十九ゲル 無敵S VS 賞金稼ぎライル (ソードマスターLv・99)

「わたしに かてるわけ ないだろう!」

モンスターの むねにしょうりした

「きわめにきわめた わがけんじゅつ もはや このよに てきはない!」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな ……スライムのばけもの!」

ライルは ヘイズスライサーを はなつた

ズバツ!

スライムは バラバラになった

「ちがったか ……うわさの むてきスライムとは いったい…
…」

ズルズル……

「むっ? こいつまだ……」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

「なっ……？」

勇者セインスライムが　あらわれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004x/>

無敵スライム

2011年10月30日18時38分発行